氏　　名		史　子涵
学 位 の 種 類		博士（美術）
学 位 記 番 号		博美第 33 号
学位授与年月日		令和６年３月２５日
学位授与の要件		学位規則第４条第１項該当者
題目	学位論文題目	絵画における芸術表現としての反復性
	研究作品題目	《ある日、403 号室》シリーズ 作品 1 《ある日、403 号室-ハイリタイ》 作品 2 《ある日、403 号室-デタイ》 作品 3 《ある日、403 号室-ノボリタイ》 作品 4 《ある日、403 号室-コキュウシタイ》
論 文 審 査 委 員		主　査　教　授　井手　康人 副　査　准教授　吉村　佳洋 副　査　准教授　岩永　てるみ 外　部　徳川美術館 審査委員　副館長　神谷　浩

１　学位論文の要旨

本研究では、筆者が現代社会の生活において反復によるフラストレーションを感じたことを発端とし、反復の意味について考察した。自作の表現に結びつく心的要因として、暮らしの中での繰り返しというものが筆者にとって大きな比重を占めていることに気づいたことをきっかけとし、そこから派生する「反復」に着目し制作を開始した。

ペースの速い都市生活や、絶え間ない時間の流れ、氾濫する工業製品などは、すべてが反復される生活パターンに囲まれていると感じさせる。反復は人生のあらゆる瞬間、あらゆる場所に無限に積み重なり、人間のあらゆる行動も反復の影響を受けている。

この「反復」とは人々に何をもたらすのだろうか。また、人々は反復によって何を失うのだろうか。反復される生活パターンは、自己実現の基盤となるのだろうか。それとも自由への欲求を制限するのだろうか。このような疑問を抱えながら、筆者は自身の日常生活から出発し、繰り返される時間の流れ、画一的な建造物、機械化により生み出される大量な工業製品などが現代人に与える感情的な影響を作品の中に表現したいと考えている。

筆者は中国北部の小さい町から日本に来た。日本の環境で生活を始めた最初は、日本社会は無意味で機械的な印象を持ち、長い間、生活の反復はフラストレーションの原因となっていた。しかし、時間が経つにつれ、どんなに無機質な社会であっても、その強固な枠組みの中で人間の感情が広がっているということに気付いた。無機質で情の通わない社会の中でも生き残っている人間の感情というものには本質的なものが色濃く残り、繊細に見えながらも粘り強く、静けさの中に力強さを隠し持っているように考える。

日々の生活の繰り返し、社会構造、社会規範における規則性は、毎日繰り返されるルーティンに対応するために使用される。この規則的な反復の中で、現代の無機質な生活環境

と人間の抑揚のある感情との対比がより際立ち、筆者の作品と実際の感情が反復という観念で繋がっていく。

本論の第 1 章「自作の考察」では、反復という言葉を自分の経験や思考の中で分析した。また、自作品の創作理念との関連で、自身における反復の重要性について探究した。そして、自作における反復の観念の探索として、「反復と秩序」、「安心感と不安感の衝突」、「集団における個人」、「反復と社会現象」の四つのキーワードを中心にして考察した。

第 2 章「絵画制作における表現手段の考察」では、「線の配列」、「造形の反復」、「構図の反復」と「数の積み重ね」の四つのポイントでいくつかの芸術作品を参考にして考察し、自作品の制作方法を挙げ、絵画制作における表現手段についての分析を行った。

第 3 章では、「反復表現」における意識の伝達についての探究を述べた。筆者は反復の視点を持った文学作品や、音楽作品、観念芸術などの絵画以外の社会的文化領域から、反復の観念を考察した。また、これらの作品の考察と分析を通じて、自身の作品制作に与える影響についても分析した。

第 4 章では、研究作品《ある日、403 号室》シリーズをめぐって、「時間の叙事性」、「現代の孤独」、「家」の三つのキーワードで制作のコンセプトと制作過程を説明した。この作品は、《ハイリタイ》、《デタイ》、《ノボリタイ》、《コキュウシタイ》の 4 つのセクションに分かれた連作である。ドア、間取り、階段、エアコンという 4 つの要素に焦点を当て、日常生活の中で反復される表現であり、「家に入りたい」、「家から出たい」、「階段を登って、早く目的地に着きたい」、「自由に呼吸したい」という最も原始的で基本的な欲求の表現を目指した。

この作品では、自分の体験を出発点として、自分の過ぎ去った時間、自分が住む空間、毎回の呼吸、思考をひとつひとつ記録し、自分自身の理解を出発点として、現代人の生活や思考のあり方を探りたいと考えて制作した。作品制作を通じて、人間の感情の多面性や矛盾性を記録し、自分の体験を出発点として、現代人の複雑な情感体験の中での生命力や自己意識の追求を探求することを目指した。

最後に、結論として絵画における「反復表現」の可能性や新たな展望を述べた。各領域の作品の分析を通じ、芸術作品の中での「反復表現」が外部の客観的な現実や社会生活と密接に結びついていることを示し、「反復」の概念は芸術、文化、感情、社会などに大きな影響を与えることを理解した。芸術的な手段である「反復表現」は客観的な現実に合致しており、現代芸術においてますます重要な表現方法となることを論証した。

本研究は、芸術や文化の領域において反復という概念が持つ重要性を理解し、より深く考察するための一歩となるものである。博士後期課程での研究を通じて、反復される要素やパターンで、物事の緩やかな変化、進化、流れを提示し、人間の感情の多面性や矛盾性を記録することが可能であると主張している。反復的な表現手段や発想により、筆者は日常生活の反復の中に潜む微細な違いに焦点を当て、反復には変化も含まれ、変化の積み重ねが独自の美学や意義を生み出す可能性を示唆した。また、絵画における反復表現の分析を通して、筆者は退屈な反復パターンの中で自意識の微妙な変化に注意を払い、自分を取り巻く世界をより鋭く観察・認識できるようになった。今後の創作活動においても、より多様な視点や方法を取り入れて、反復の概念についてさらに深く探求していくことを目指す。

２　学位論文審査の要旨

【論文】

史子涵の学位申請論文「絵画における芸術表現としての反復性」は自身の創作理念について、「反復」をキーワードとして自身の生活における感受性や他者による作例から読み解く研究の論考である。芸術表現の思考を深めながら研究作品《ある日、403 号室》における反復表現についての可能性を論文で示そうと試みる。本論全五章の構成のうち、第一章は自作における反復の基本理念を示すために、「反復と秩序」、「安心感と不安感」、「集団における個人」、「反復と社会現象」をそれぞれサブテーマに据えながら、自作と反復との関係性の整理を行う。第二章では「線」、「造形」、「構図」、「数」といった自作でも用いる絵画構造について、他者との比較から考察を行う。第三章では音楽や文学など、絵画分野以外での芸術に関わる反復の要素を抽出することで、絵画という静止した構造の中に、時間的な叙事性を求めていることを定義づけようとする。第四章では、研究作品《ある日、403 号室》シリーズの制作動機や表現方法について、「現代の孤独」、「家」、「反復からもたらす矛盾」の３つのキーワードを軸に制作される複数作品の分析を目指し、第五章ではこれらの総括から得られる結論が論述されており、現在の成果と今後の方向性を示している。

【作品】

研究作品については、研究の根幹である反復表現についてどのような表現をするのか、「時間の叙事性」、「家」、「現代の孤独」をキーワードし、《ハイリタイ》、《デタイ》、《ノボリタイ》、《コキュウシタイ》という 4 つの作品の連作とすることで、心理状態を表象することを試みた。

《ハイリタイ》ではほぼ同一規格の室内表現により自身の繰り返されるやや欝な日常を反映させつつも、毎日を記録するような試みによって微妙な心理の変化を表そうとする。《デタイ》では、異なった間取り図を迷路に見立てて配置しているが、実際は毎日繰り返される「部屋の出入り」を反映させている。それは無意味なようでもあり、示された赤い線のような人生の地図のようなものかも知れない。「辿った跡だけ色付けすることが楽しい」とする本人の談から、作品との連環を強く感じさせる。《ノボリタイ》は玄関ホールと階段が並列し、日常の反復の中でも階段を上るという身体的かつ孤独な繰り返しと、疲労から支配される心理状態について表そうとする。縦に連なる無機質な階段だけではなく、ヒトの気配を感じられる玄関ホールとの対比が秀逸である。《コキュウシタイ》はエアコンの室外機を構成的に幾重にも配置し、いまや生活と切り離せない存在であるエアコンの室外機を呼吸するものになぞらえて、それを動きのある構成でまとめることで、はじめに描かれた《ハイリタイ》から徐々に反復の多様性が表現されているようになり、進化が見られる。以上のように論文と作品の論旨や研究方法には一貫性があり、作品の質も高いため、論文、作品ともに充分に評価でき、博士学位に値する高い内容であったと結論づけた。

【口頭発表】

史子涵の口頭発表及び口頭試問においては、論文内容を的確に説明し、結論に至るまでの概要を分かり易くまとめられているものであった。

外部審査委員である神谷先生からは、三年間の制作の中での変化をより表す上でも、作

品タイトルに副題として拒絶、許容、和解などの心情の変化をより読み解ける工夫があれば尚更良いのではないかとのご指摘を頂き、史自身も参考になった様である。

現時点での墨色を基調とした制作から、今後は有彩色を使った作品への展開も非常に可能性を感じる研究内容であった。

以上のように、史子涵はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

３　最終試験結果の要旨

論文では、清時代の水墨画から始まり、他分野の文学、音楽、舞踏との関連も幅広く考察が行われており、自身の創作理念における反復をキーワードとする表現手段の定義付けが明確に行われていた。外部審査員より日本での心境の変化に着目し制作論に落とし込む方向性を評価する一方で、自身の心中の表現が中心となるため、特に論文の核となる「反復」という用語の使い方や、類似表現の選定基準がやや曖昧であるとの指摘があった。これに対し研究作品へ至る思考の道程を示しながら、用語の持つ意味について回答する事が出来ていた。

作品については、一貫したテーマを持ちつつ、三年間の自身の心理状態の変化が反映されるものとなっている。全ての作品において表現しようとする内容が反復性のある造形と融合し研究の論旨が高い次元で実践されている。大変完成度が高く見応えのある仕上がりとなっており、三年間の堅実な研究と制作が評価できる内容で、今後の作家としての可能性を大いに感じさせるものとなった。

史子涵の口頭発表及び口頭試問においては、論文内容を的確に説明し、結論に至るまでの概要を分かり易くまとめられているものであった。

以上のことから、史子涵の論文、研究作品は博士後期最終試験において、外部審査委員を含む４名の審査委員全員による審査の結果、実技系博士論文に望まれる基準を充分に満たしており、学位授与に値すると結論に至った。